
風の強い日、星と会話。

一柳 紘哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の強い日、星と会話。

【著者名】

一柳 紘哉

N4062A

【作者名】

【あらすじ】

タンポポに追われている僕は、サンマンから紹介してもらつた彼女にタンポポとその綿毛から逃げ切る方法を尋ねたんだ。 + + + この話はさすらいの物書き様企画の「三題廻」です + + +

(前書き)

“ I know what I say ”
何を言えばいいかわかつてんんだ。

何時だつたかもう忘れちゃつたけど、お母さんに質問した事があるんだ。

- ねえお母さん。僕の家が全部タンポポでできるんだつたり、お母さんもタンポポなの？ -

つて。お母さんは洗濯物をたたみながら僕に言つたんだ。

- そうよ、当たり前じゃない。お母さんもお父さんもタンポポよ -

そして僕は笑顔になつてもう一度お母さんに尋ねたんだ。

- じゃあ僕もタンポポなんだね -

母さんは洗濯物を放り投げて、僕の肩を揺さぶつて言つた。

- 違つに決まつてるじゃない！ なに言つてるの？ あなたは人間なによ、覚えておきなさい -

僕は泣いてしまつた。そしてなぜかお母さんも泣いていた。泣き声でいっぱいの部屋に、やけに通る声でこう聞こえた。

- それが大事なのよ -

それが大事なのよ。確かにそつなかもしれない。コーヒーを飲みながらそう思った。

「で、これが一緒に住んでる“タンポポに追われてる人”」

と、サンマンに紹介された僕は一言、どうも。と言つて彼女に一礼した。色素が薄い、消入りそうな彼女はなんにも言わず煙草の煙を細く吐き出した。鼻から煙が出ていなかつたことに少し好感が持てた。

春が近づいて来ているといつても、この風の寒さは忘れられた冷凍庫の海老のように僕の体を冷やした。彼女が煙草が吸いたいなんて言わなければ、スタバの店内で陽だまりの犬のように暖かかつたのに。まあしようがない。

「彼はねえ大変なんだよ。彼のお父さんとお母さんのせいにタンポポに追われる」とになっちゃつたし。」

サンマンは僕の身の上に起つた不幸な話。新品の服が泥で汚されるよりもひどく不幸な話を彼女に説明しだした。しかし、まあどうでもいいけどサンマンは何時も言動が暑苦しい。そんなサンマンを僕と同じように鬱陶しそうに見ていた彼女は、サンマンの話をさえぎるよう口を開いた。

「彼のことなら知ってるわ

「あれえ？俺話したつけ？」

「うんうん、話してないわよ。でも知ってるの。彼の親が失踪して、彼の“タンポポの家”的借金がタンポポ達に返せなくなつて、差し押さえられて、それでもまだ足りないから彼の体をタンポポたちの綿毛、つまり種の肥料。“苗床”にする契約書に母音を押したのはいいけど、春が近づいてきて恐くなつて、逃げ出して、サンマンの家に転がり込んだことはね。どう合つてるかしら？」

彼女は艶やかに「」を手に乗せて、透き通るようになんと僕をじっと見てきた。自信であふれたその顔は何もかもを見通しているようだ。なぜかとっても不安になつた僕は視線を外し。左手の中指と、右手の親指はめてある指輪を交互に見た。どうなの、合つてると？と彼女がもう一度尋ねてきたので僕は言った。

「はい、間違ないです。合つてます。ところでサンマンの言つた通り本当にあなたは何でも知つてるんですか？」

「さあ、じつかしら」

意味ありげに彼女が微笑む。

「まあいいです。僕の知りたいことさえ知つてればなんでも」

「知りたいことって、タンポポから逃げ切る方法？」

「はい。そうです。知つてますか？」

「ねえ俺コーヒーなくなつちやつたから買つてくるけど」

サンマンは暑苦しそうに空氣も読めない。それだけ言つとサンマンは立ち上がりてカウンターに歩いていった。

「サンマンつて暑苦しいけど、いないと困るのよねえ」

「照らしてもらわないと何にもできませんもんね、僕ら」

そうね。と短く答えて彼女はまた煙草に火をつけた。薄く目を開

じて彼女は言った。

「タンポポから逃げ切る方法ならあるわよ」

「教えてください」

「あなたラジオ体操の歌つて知ってる?」

「はい。ラジオ体操第一ですよね」

「それじゃなくて、ラジオ体操の前に歌うやつ。新しい朝が来たつていひやつ」

「ああ、ありますね」

「それね、ずうつと流して「なさい。寝るととも、」」飯食べるときも、お風呂に入つて「るときも」

「やうすればどつなるんですか?」

「タンポポ達は近づいてこれなくなるわ。もちろん綿毛も」

「それだけで?」

「そう。それだけでよ」

僕は彼女に言われた事。つまりラジオ体操とタンポポの関係性の意味を少し考え、又、同時に春の少し浮かれた季節の中で、ずうっとラジオ体操の歌を流している自分の姿の事を少し想像した。正直どちらも、いかれた気違いだと思い、もうなんだからうんざりした。

でも、僕のこの状況を考えたらそれしか道が無いみたいだ。何で獸道だろ？。

「外出するときが大変そうですね

と僕が言った。彼女は本当に鬱陶しそうに、まるで小さなもので見るよつに僕を見た後こづつ言つた。

「そうね。でも、私が知つてゐる方法はそれしかないからしょうがないじゃない。」

僕はぬるくなつたコーヒーを飲み干して、風でざわつく街路樹に目をやつた。葉の抜け落ちた木は寂しそうに僕の田に映つた。サンマンは新しいコーヒーを持つて彼女の横に座つた。彼女は又細く煙を吐いた。

そして、僕はどうも浮かれた春という季節にラジオ体操の歌をずっと流さなければ、タンポポの苗床になつてしまふ事になつた。

つまりそういうことだと思つ。うん。そういうことだ。

季節は音も無く、田に見えるわけでもないが、確實に春になろうとしていた。

それから僕達は映画を見た。戦争の映画だった。人がいっぱい死んでいった。主人公は何にもしなかつた。なんにもね。

映画を見終わつた僕達は、やりたい事も見つからなかつたから少し時間が早いけど家に帰つた。彼女は自分の家に、僕とサンマンは、サンマンのアパートにあてもない空を眺めながら帰つた。

サンマンのアパートにつき、夕飯を牛肉とピーマンの和え物にするかシメジと椎茸の卵どじにするかで悩んでいたら、僕の携帯の着

メロ。彼女に無理やり変えさせられたラジオ体操の歌が流れた。電話に出ると、彼女だった。

「ねえお願ひ！…ペットが大変なの…お願いだから助けて」

彼女の声はとても大きく、おもちゃ売り場で泣いてる子供のようだつた。電話越しでも慌てている事がはつきりと伝わってきた。僕とサンマンはパニックに陥つていた彼女を何とか落ち着けさせて、大変なことになつているらしいペットを助けるために彼女の家に行くことになった。

急いで身支度をして、アパートの扉を勢いよく開けた。夜になりかけた群青色の空がとても印象的に僕らを向かえ、強い風が僕らの背中を押してくれた。

電柱の脇に止めてあるサンマンの車に乗り込んで、ワーグナーのタンホイザーを聞きながら彼女家まで急いだ。

めまぐるしく変わる景色の中に違和感を覚えたのは、群青色の空が消え、夜の闇が完全に支配した頃。

いいや、彼女の家が近くなってきたときだつた。

知つてゐるのだ。彼女の家があるこの町の事を。なぜ？僕が生まれた町だからさ。道の端にある煙草屋や、看板の無い酒屋、それにこの坂道を下つたところにある“タンポポの家”。

僕はタンポポを見つからないように姿勢をできるだけ低くして、睨みつけるように辺りを見渡した。ワーグナーの曲は僕の心臓の音と見事に調和し、不安がべるの先っぽの方まできていた。

サンマンからサングラスを借りてみたのはいいけど、それでも不安は消えることなんてく、僕を精神的にも肉体的にもさわつかせた。

それでも、車は坂を登り、青い家の前に止まつた。

彼女は青い家の前にうずくまつっていた。車を降りて、僕とサンマ

ンが声をかけると、彼女は消え入りそつた声で「いつ言った。

「お願い……もう私の言つことなんて聞かないの……危ないからやめてつて言つてるのに……」

昼間会つた彼女とは別人のようだ。艶やかで、自信にあふれていた声は無くなっていた。

サンマンが彼女をなだめている間、僕はタンポポ達に見つからないように垣根の隅に隠れていた。だから詳しい事はわからないが、どうも屋根の上にペットが上つてしまつたという事らしい。

僕はそつと屋根の上を眺めてみた。確かに風見鶏の横にスース姿の男が座つている。サンマンが僕に言つた。

「なあ、俺ここで彼女のこと見てるからわ、悪いんだけど屋根の上に上つてペットに降りてくるように説得してくれないか？」

屋根の上なんてまるでタンポポ達に見てくれなんていつてるようなもんじやないか、嫌だ。

「『めん嫌だ』

「そんな事言つなよ、お前彼女に貸しがあるだろ」

確かに彼女は無償で僕にタンポポから逃げる方法を教えてくれた。御礼はいつかしなくちゃいけないと思っていたのも事実だ。

ため息が先にこぼれたが、諦めた僕は屋根に上ることにした。

一階から上がるから、と言つた彼女は玄関を指差した。

僕は青い扉を一応ノックしてから開いた。真っ暗な玄関で靴を脱いで、すぐ脇にあつた階段を上つた。

階段を上りきつて一階に来たはいいが、部屋に勝手に入るのも失

礼だと思こどりうかと悩んでいたら後ろから声が聞こえた。

「奥の左の部屋、私の部屋ですか？」からどうぞ、上がってきてください」

振り向くと、階段の向こう側に小さな丸い窓があり、そこからブラブラとスース姿の足を揺らしているのが見えた。多分、風見鶏の横に座る彼の足だろう。

僕は言われたとうに、奥の左の部屋にいった。部屋の中にはベットとテーブル。壁に、空中ブランコに乗る鹿の絵。しかなレシンブルな部屋を抜けて、ガタガタの窓を開けてベランダに出た。

一応、携帯の着メロだが、やらないよりはましだと思い、ラジオ体操の歌を流した。ずっと流れるようにリピートにし、音量を一番ひくく設定して、上着のポケットにしまった。

上半身の力だけで屋根の上まで上がり、不安げな足取りで何とか風見鶏の横に座る彼の横に僕も腰掛けた。

下を見ると、不安そうに彼を見る彼女が見えた。サンマンは彼女の肩を抱いて寄り添っている。タンポポの姿はない。少し安心した。

「ほら。彼女心配しますよ、降りませんか？」

「そんな事をいわれても……これが私の役目ですからねえ」

僕はここではじめて彼の顔を見た。夜空の星を眺める彼の顔は立派な、完璧な三日月だった。

薄く、金色に光る彼の顔はどうか少し疲れて見えた。

「スース……似合つてますね」

「え、あ、これですか。彼女が着せてくれたんですよ。ありがとうございます」

綺麗な笑顔の彼はそれだけ言つと、また夜空を眺めだした。僕は足を抱きよせて、彼とおんなりようにに空を眺めた。僕のポケットから小さく流れるラジオ体操の歌だけがこの沈黙を崩していた。

「その曲……私への……あてつけですか？」

と彼が笑顔で言つた。

「え、いや御免なさい。気がつかなくて……そりですよね」

僕はポケットから携帯を取り出して、曲を止めようとした。でも、できなかつた。これを止めてしまうとタンポポ達に捕まるかもしれない。そう思うと怖くなつて、こんな自分の状況が惨めになつて、泣いてしまつた。

気がついたら全部話していた。彼に全部、身の上に起つてことをすべて話していた。

初めて会つた彼に、泣きながら、情けなくなるほど震えた声で、僕はタンポポ達の肥料なんかになりたくないんだ。と咳きながら。

「大変ですね……」

「……あそこが僕の、タンポポの家なんです」

僕は自分の家を指差した。街道沿いのケバケバしたラブホの明か

りで、僕の家は夜だというのに浮き立つて見えた。

黄色い花の屋根。緑色の家の壁。綿毛でできた垣根。懐かしい思い出と一緒にまた涙が溢れ出した。

彼は、僕の肩をトントンと優しくたたいた。

「携帯……貸してくれませんか？」

いいですよ。と言った僕は携帯を彼に渡した。まだラジオ体操の歌が流れているそれは彼の手の中で赤い火の玉になつた。

「私にはこんな事しかできませんから」

と、笑顔で彼は言って、携帯だつた赤い玉を夜空に投げた。

遠く、夜空に吸い込まれるように赤い玉は消えた。一瞬何が起つたかわからなかつた僕は、ただただ夜空を眺める事しかできずにいた。

しばらく、ぼつぼつとしていたら赤い流れ星がひとつ、夜空に現れた。

赤い流れ星は夜空を自由に駆け回つていぐ。

いきなり、いや、だんだんとその流れ星を追うようにすべての星が動き出した。最後には空を覆つすべての星が赤い流れ星を追つて流れ星になつた。

サングラスを外して見たそれは、夜の闇の中を泳ぐ金色の熱帯魚の群れのようで、降り注ぐ金色の雨のようで、どんなものよりも綺麗で怖くて、でも綺麗だった。

「星には願いをかなえる力があるのかどうかは私にはわかりません。でも、流れ星に願いを託すやり方は好きです。さああなたのためになつたのですから、願い事を言ってください」

彼は立ち上がり。両手を広げ星達に挨拶した。まるで指揮者のよ
う。

あれから季節は流れ、春も終わるうとしていた。
僕はサンマンと一緒に彼女の家に遊びに来ていた。

「ほら餌よ」

彼女は彼にいい匂いがする混ぜご飯を与えていた。
サンマンはいつもどおり暑苦しく、いつもとおんなじよつと空氣
も読めずにこう言った。

「でさあお前あの時の流れ星になんてお願ひして、流れ星に何で三
回言つたの？」

僕は綿毛だらけの手でマグカップを持つて、彼女の作ったインス
タントのコーヒーを飲んだ。インスタントにしてはまともな味だっ
た事にびっくりした僕は、軽い笑顔になった。

彼女はサンマンヒ、綿毛で丸丸モコモコになつた僕を交互に見
て呆れたようになつて言つた。

「見ればわかるじゃない」

僕は窓越しに外を見た。暖かそうな口差しはキラキラと緑色の光
を照らしていた。

-それが大事なのよ -

と、何時だつたか忘れちゃつたあの日。お母さんと泣いていた
そのままにやけに通る声で、どこからか聞こえた。
多分屋根の上の風見鶏が言つたのだろう。

今日は風が強いから。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。このモノはさすらいのもの書き様の「三題廻」という企画にそつて作りました。他の参加した作者様、さすらいの物書き様、本当に「三題廻」楽しめて書く事ができました。いい企画をありがとうございました。又、何があるときはよろしければ、「一緒にさせてください、ね。

* * * 夏苗さん一度もメッセージ有難う御座います。リアクションが少なくて本当に申し訳ないです。返信したかったのですが、どうもやり方がわからず……スマセンでした。

僕のモノのファンだと言ってくれてもう本当に嬉しかったです、踊りだせるぐらい。

本当に有難う。これからもよろしくお願いしますね。
ピース。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4062a/>

風の強い日、星と会話。

2010年10月17日06時37分発行